

聖書：使徒言行録2章14節-41節  
『五旬祭の説教』

ユダヤ教の大きな祭の一つ五旬祭の日に、イエス・キリストの弟子たちは集まって祈っていました。その時弟子たちの上に聖霊が降り、弟子たちは霊が語らせるままにいろいろな国の言葉で語り始めました。その様子を見ていた人たちの中には、こいつらは酒に酔っているのだ、と嘲る人たちもいました。

そこでペトロは11人の弟子たちと共に立ち上がり、居合わせた多くの人々に向かって語り始めました。人々はいったい何の演説が始まったのか、と思ったでしょう。彼は声を張り上げて語り始めました。「ユダヤの方々、またここにいるすべてのの方々、わたしの言葉に聞いてほしい。わたしたちは酒に酔っているのではない。」そう言って語り始めたペトロでした。

このペトロの演説こそ、キリスト教会最初の説教です。そして、この説教こそ、公開の、公に向かって語り始められた、キリスト教会の福音伝道の始まりです。

説教は礼拝の中で語られるものであります。しかしここには、福音を告げ知らせる、という説教の原型があります。説教とは何か、ということを考えるときの最も原初的なモデルがここにあります。キリストが昇天する直前に言われた言葉、「あなた方の上に聖霊が降ると、あなた方は力を受ける。そして地の果てまで、わたしの証人となる」、という言葉が、今現実となり始めているのです。

クリスチャンが何人か集まって雑談が始まると、説教のことが話題になることがあります。「わたしは〇〇牧師の説教で鍛えられた」とか、「どこそこ教会の××牧師の説教は素晴らしい」とか、「〇〇牧師の説教は難しい」とか。「長い」とか、「短い」とか。牧師同士の会合でも、説教のことは当然よく話題になります。牧師にとっては、毎週担っていく課題ですし、クリスチャンにとって説教は毎週聞くものだけに、一人一人、思うところ感じるところがあるのは、当然かもしれません。その場合、説教とは何か、何が語られることが説教なのか、という素朴な問いがとても重要です。話としてどうだ、旨い下手、というレベルの話ではなく、何が語られていくことが説教なのか、という問いです。

ペトロは五旬祭の日に、いきなりというか、突然立ち上がって説教を始めた。おそらく直接のきっかけは、人々があいつらは酒に酔っているのだ、というこ

とに対して、そうじゃない、ということが言いたかったからかもしれません。しかしそれはあくまでもきっかけです。

彼の中に、語らなければ、という何かが起こってきた、与えられていた、ということでしょう。言うまでもなく、ペトロは、ここで説教するために、用意周到な準備をして語り始めたわけではない。漁師だった彼が、今日云うような説教のための学びを十分していたわけでもないし、説教とは何か、ということの特を考えていたわけでもないでしょう。にもかかわらず、彼は立って語りだした。なぜか。語らなければならない、ことがあると彼が受け止めていたからです。自分が神から示されたもの、出会わされたもの、それを彼は語らなければならないと受け止めていた。そしてそれこそが、聖霊の働きによるものでした。

ペトロがこの説教で語ろうとしたこと。語り告げようとしたこと、それは一つのことだと思います。この最初の説教の中で彼は旧約聖書を四回も引用して、あれこれ語っています。しかしそれは、一つのことを語るためだった、と言えるのではないか、と思います。

その一つのこととは、24 節「神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。」神はイエスを復活させられた、ということです。

32 節でもそのことが繰り返されます。「神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。」

十字架にかかって死んだイエスを神が復活させられた、それがペトロが語る福音です。これがペトロが語らなければならないと受け止めていた福音です。

エルサレムにこの祭りのために集まってきた人たちの中には、つい 7 週間ほど前にこのエルサレムで十字架にかかって死んだイエスのことを知っている人も多くいたでしょう。地上での活動や言葉に関心を寄せ、十字架での死を見届けた人もいたでしょう。そして、その歩みや働きも、十字架の死で全部終わった、と人々は思っていたでしょう。確かに、神の国を宣べ伝えて、イエスという人はいろいろなことを語ったけれども、とにかく死んでしまってそれで終わりだよ、とみな思っていた。どんな日常で立派な活動をして、宗教的な働きをしたとしても、死んだんだから、それでもう終わりだよ、と思い定めていたのです。

ペトロも、他の弟子たちもみんなそう思っていたと思います。

しかし、ペトロがここで語っているのは、十字架の背後には神のご計画があ

り、十字架で死んだイエスを神は復活させたのだ、ということです。ペトロにも大きな変化が起こっています。だがペトロはここで、自分がかつてこういうことをイエスに期待していたけれど、十字架で失望し、今現在はこう感じている、というような自分の心境の変化、というようなことを語ってはいない。そんな自分に関するのではなく、ただ単に、神がイエスを復活させた、と語っているのです。これがキリスト教会の語る福音なのです。

キリスト教会の説教の中心にはこの事実があります。説教でどれだけいろいろなことを語っても、どれだけ興味深い話で、おもしろくて、ためになって、役立つ話満載でも、この一つのことが中心に据えられていないのなら、それはキリスト教会の説教ではない、ということです。

神がイエスを復活させられた。その告げ知らせの前でわたしたちの思うことは何でしょうか。まずわたしたちには、それはよくわからないことだ、ということが言えるでしょう。勉強したらわかるとか、熱心さに応じてわかってくる、というものでもない。理性、知性で把握できるものでもない。それはわたしたちがこのことを聖書を全然知らない人たちに語ったらすぐにわかることです。神がイエスを復活させられた、そのことを語ったら、勘弁してよ、話題変えよ、と言われて引かれますよ。万が一聞いてくれたとして、イエスを神が復活させたことがわたしどう関係あるの、という問いが返ってくる。

復活はわたしたちにはわからない。実際、復活は十字架とは違い、人間は一切関与していない、神のみの働きです。復活はわたしたちの中にあるもので類推できるものではない。ただ神から与えられ、示され、信仰で受けるのみのもので。受ける以外ない。わからない、ということはわたしたちからのアプローチは無理ということです。神が示され、与えようとされる仕方で受けるのみ。聖霊はそこで働く。

ペトロも、他の弟子たちもイエスが十字架で死んで、全ては終わった、と思っていたのです。しかし弟子たちは復活の主イエスと出会い、聖霊の働きの中でイエスを復活させたまう神と出会うのです。

神はご自分がわたしたちの救いのために生きて働いていることを、イエスを復活させるそのことの中で示された。しかしそれはわたしたちの力では知ることとはできない。それを知ることも神の働きによるのです。

ペトロはこれまでずっと見てきたように、普通の人です。どういう意味で普通かと言えば、自分の我が強く、自尊心も強く、自分本位で、偉そうなところもあり、もちろんちょっと謙虚なところもあり、信仰的な揺れ幅も大きく、調

子のいい時もあれば、ダメな時もある。だが調子のいい時というのも、正しい判断ができていないかと言えば全然そうでもなく、しょうもないところで強情だったり、という意味で普通です。そのペトロが福音の説教をする。もし彼が自分の自慢話をしようというのなら、そういう普通のペトロが話に出てくるでしょう。謙虚ぶっても自分本位な普通の自分が出てくるでしょう。しかしペトロはここで、福音の説教を始めている。それは彼の中からのものではない。それは自分によって獲得したものでもない。彼に与えられ示されてきたものです。神はイエスを復活させられた、それは神がわたしたちの救いのために、事実、生きて働いておられるのだ、ということの宣言です。

たとえどんなにわたしたちの働きが行き詰まり、主イエスを十字架にかけてしまうような罪の連続であっても、どんなにわたしたちがペトロのようにキリストを裏切りながら生きていて、とても救われる価値などなさそうな人間であっても、神はイエスを復活させて、わたしたちの救いの道を拓いてくださっている、という福音です。「あなた方が十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシア（つまりキリスト救い主）となさったのです。」ペトロの説教の主語は根本神です。神が復活させ、神がイエスをキリストとなさって、神がわたしたちの救いのために働いてくださっているのです。ペトロはその一つのことを語った。そしてそこで悔い改め回心し、洗礼を受ける者が与えられた、というのです。神の働きを受けていきましょう。どんな人間、どんな状態にあっても、イエスを復活させた神の恵みの中にある自分を、信じて、その福音を証しする者として歩んでいきましょう。